

イラストレーション —日常と非日常—

Illustration —Daily Life and Non-Daily Life—

石黒 康弘



アートとかデザインとか言うものがある、私達の日常生活において潤いやら、癒しやら、ゆとりやらの感覚を与えてくれている。中には、こうした類の事にさしたる興味も、そして関係もなく暮らしていると言う人もいるかも知れない。しかしながら、今の日本社会で生活している場合には、多分、アートやデザインの分野と全く無縁であると言う事はなかなか難しい。現代社会においては既に日常生活における大概のものが、こうした分野からの洗礼を受けて機能しているため、意識している、していないに関わらず、やはり何らかの影響を受けていると考えた方がむしろ自然なのである。

ただ、こうしたジャンルに属するものが本当のところどれだけ重要で、どれだけ必要であるのかと言うと、平素は良く分からないところもあったりする。本当に大事ななんだろうか？ 無いと困るのだろうか？…

たとえば、戦争なんかが起きたら、芸術家なんて人種は真っ先に失業するかも知れない、それは本来無くても困らないからだろうか？ 豊かな環境下であればこそそのアートやデザインであって、そうでない場合は必要とされないのだろうか？…

実のところ、多分それは順序が逆で、こうした分野と言うのは往々にして、興味がない人達にとっては必要でないように見えやすいのである。そのため、有事の際などに分かりやすいスケープゴートの一つとして利用されてしまうのだと思う。

ともすると勘違いしそうであるが、現代社会の豊かさと、アートやデザインの世界の豊かさの間には、特段、相関関係は存在していない。芸術などと言う分野も、これが実は根源的な分野で、人類の歴史をさかのぼるだけさかのぼっても、ちゃんと存在しているのである。



太古の人達は大地に絵画を描き作品を残しているし、土器には流麗なデザインが施されている。また、弦楽器などは、大昔、狩猟で使った弓の弦を宴の席等ではじいて楽しんだりしたところから始まり、やがて、もっと大きな音を出すべく工夫して、弓に箱のようなものを取り付けたのがルーツであると考えられている。そうして、武器としては役に立たない、音を出すための楽器となって、さらに進化して行った訳である。

文明が発達して、社会が豊かになって来たので、本来無くても困る訳ではない芸術の如きが、そのゆとりの狭間に生まれたと言うのではなく、芸術の分野は、ほとんど人類の歴史と共にあったと言っても過言ではないと思っている。もっと踏み込んで言うなら、きっとこの辺りの事には、より重要な要素が含まれているのではないかと言う気もする。どうして人は絵を描いたり、音楽を楽

しんだりするのか？ 根拠の程は別として、チンパンジーは3歳児程度の知能を持っているとか言われている。人間で3歳と言えば、プリミティブではあっても絵を描ける年齢だ。しかし、本当の意味で絵を描いたり、音楽がわかっていると言うチンパンジーは多分いない。地球上で人間だけが芸術を生み出し、それを理解する事が出来るのである。このような分野が、「あっても無くても、どちらでも…」とは、やっぱり私には思えない。

でも現実には、もし戦争なんかが起きたら、結局、真っ先に失業してしまう分野なんだろうか？ 音楽をやっている人は慰問公演会なんて称して、往年のマリリン・モンローよろしく歓迎され、楽しいかも知れない。絵描きの類なんぞ、お前は従軍画家だとか言われて「友軍の勇ましい姿を壮大に描け！」などと、およそ創作意欲も湧かない話しをされた日には、悲惨この上ないのである。